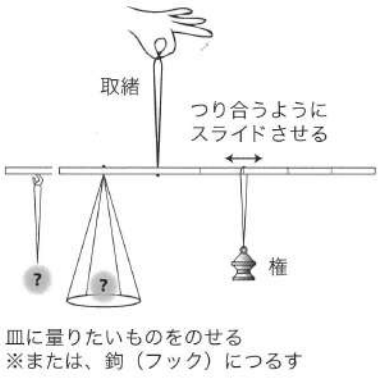
市民と博物館

149 2024.1.31

日立市郷土博物館



棹秤のイメージ

資料紹介　山尾城跡出土「権」

今回、紹介する資料は山尾城跡（十王町友部）で出土した、権（ごん／けん）です（以下「山尾権」）。権とは棹秤に用いる錘のことです。棹秤は図のように、棒状の棹の片方に釣った皿に計りたいものをのせ、もう一方に釣ってある権をスライドさせて釣り合う位置を探し、重さを計ります。なお皿にのらない場合は、皿部分を鈎（フック）にして計りたいものをつり下げることもあります。

山尾権は銅製の鋳造品で、高さ4.8cm、最大幅2.7cm、重さ86.5gです。また「多宝塔」型とも呼ばれる多面体を組み合わせたような形状で、上端に釣り手の孔がうがたれています。山尾城跡の第2次調査中に、3号掘立柱建物跡の16号柱穴から出土しました。同じ掘立柱建物跡の他の柱穴からは15～16世紀代の銭貨や中世陶器が出土していることを考慮すれば、山尾権の制作年代はその他の出土遺物と同年代と推測できます。なお山尾城は佐竹氏の家臣である小野崎氏の居城であり、慶長7年(1602)の国替えに合わせた佐竹氏の秋田移封により廃城になったので、山尾権は、廃城以前の城の活動期に使用された可能性があります。

なお、山尾権に類似したものは今のところ、県内では犬田神社前遺跡（桜川市。以下「犬田権」）で出土したものが知られる限りです。山尾権より一回り小さいのですが、重量は103gあります。両権の形状や表面の文様が複雑なので、同じ手本により制作された可能性があります。また、図面のみで詳細は不明ですが、福島県伊達郡福田村（現在の福島県川俣町）の桑畑から、形状が類似し犬田権より一回り大きい権（重量34匁2分［≒130g］と報告）が掘り出されています（以下「福田権」）。

ところで我が国における度量衡の統一は律令期に始まり、その後1000年近くを経た承応2年（1653）になって、江戸幕府が東国における秤の販売権を守随家、西国を神家に認めることで制度上の統一が図られ、さらに寛文5年（1665）の幕府による「にせ分銅禁止令」で実質的な統一が果たされました。したがって山尾権が用いられた中世後期は秤の統一が進まず、各地でさまざまな権が用いられていたようです。このような状況において山尾権・犬田権・福田権の形状や文様が共通する要因は、その出土した領域の領主間の関係性、あるいはその領域で秤販売権をもつ者の存在等に求められそうですが、資料数の都合で不明なことが多く、真相の解明はこれからの研究次第と言えそうです。

（猪狩俊哉）

◆この資料は、1階常設展「信仰と政治―中世の日立―」コーナーで展示しています。

特別展示「日立鉱山に生きた人々」を観て―記憶に残る本山(ヤマ)での暮らし―

佐藤 寿子

中井川俊洋《引っ越しを見守るご近所さんたち》
1981年12月10日

昨年9月、日立市郷土博物館で写真家・中井川俊洋さんの写真展「日立鉱山に生きた人々」が開催された。中井川さんの写真家としてのスタートは、日立鉱山の閉山をテーマに選んで撮影した大学の卒業制作であった。

ヤマの男達が懐深く中井川さんを受け入れたことで彼の卒業制作は完成し、写真集『閉山』(1984年)に結実しているが、今回の特別展示ではそれらの写真に加えて、ヤマを降りた人々の足跡を閉山後の数年をかけてたどった写真と、昨年撮影された彼らの現在のポートレートとで構成されており、新たに編み直された写真集『日立鉱山に生きた人々―写真家・中井川俊洋がとらえた「閉山」とその後、そして現在』も同時に刊行されている。

初日、会場入口に立ち、写真の数々が目の前に広がったとき、70年以上前の思いが溢れた。言いようのない懐かしさで胸が熱くなり、この写真展が特別な思い出になると確信した。数ある写真の中でも《引越しを見守るご近所さんたち》からは、引越しをする人とそれを見守る人々、それぞれの想いが伝わってくるようだった。

私の父、高田源四郎は茨城師範学校(現・茨城大学教育学部)卒業後、本山小学校と本山中学校に20数年奉職した。展示されている写真に写っている方々はほとんど父の教え子にあたる。時々クラス会に呼ばれている父を見て、子供心にも本山を土台としたつながりであることが理解できた。本山鉱山病院で看護師をしていた母の綾子と父は、教師になりたての父の強引な説得があって結婚したと聞いている。

日立鉱山が栄えていた頃の生活は恵まれていた。私が住んでいた奥掛橋の社宅近くにはプールとテニスコートがあり、食品や日用雑貨を販売している供給所などがあった。お正月やお盆にはテニスコートに俄仕立ての舞台が立ち、のど自慢大会が催された。

本山劇場では演芸や歌謡ショーが行われており、その頃人気の歌手だった島倉千代子が訪れたときは護衛がついて大騒ぎであった。劇場では邦画、洋画とも封切られ、映画好きだった両親に連れられてワクワクしながら劇場に続く階段を上った。「風と共に去りぬ」「戦争と平和」などカラー映画を初めて観たのもこの時だった。また全日本吹奏楽コンクールで優勝の快挙を果たした日鉱日立吹奏楽団の演奏を初めて聴いたのもこの劇場だった。力強く繊細な楽団の音色は、行事や催し物があるごとに私たちを楽しませ、和ませてくれた。

お祭りの時には一本杉通りにイカ焼、リンゴ飴、ハッカパイプ等の店が並び、大勢の子どもたちで賑わった。プール横の空地に「ポンせんべい」を焼く機械が置かれると、近所の方々が持参したお米と料金の入ったザルが並べられ、おじさんが手際よく焼いてくれた。子どもたちは遠巻きにお米が弾ける音に歓声を上げながら順番を待った。

時折、昆布や小女子の佃煮などを入れた段重ねの容器を背負った行商人が訪ねてくると、香ばしい匂いが家中に広がり、好物の鮪の角煮をねだったりした。

私が鮮明に記憶している風景がある。小学生の頃、遊び疲れて帰る途中、杉の木立の間から見えた、茜色に染まった美しい空である。今でも思い出すかけがえのないふるさとの景色である。

(さとう としこ　西成沢町)

本山鉱山病院の看護師たち(後列左が高田綾子さん)